
Cafe Slow Life

木立あろえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cafe Slow Life

【Z-コード】

Z4099C

【作者名】

木立あろえ

【あらすじ】

のんびりとした空気ただよう「喫茶スローライフ」お客のいない休憩時間。マスターとアルバイトの女の子「あゆむ」がとりとめの無い話をしていると、ちょっとした事件が。店の金魚鉢を、小さな猫が店の入り口から狙っていたのだ。マスターと、アルバイトの女の子。そして店に住み着いているかのごとく通いつめる常連。三者の織りなす、喫茶店ストーリー。

(前書き)

初めての投稿です。
一行一行を大切に、すべての行に魅力を持たせるよう、努力しています。

未熟者ですが、よろしくお願ひいたします。

一杯だけたてるコーヒーについては、妙にさうとしてしまって味気ない。だから最低、コーヒーはいつも一杯以上たてるようしている。

いつものカウンター席に座つて、この店のエプロンをした真っ黒なショートカットの女の子、西村がコーヒーを飲んでいる。高校二年のとき初めてこの店でバイトを始めた西村ももう三年目、大学一年生になった。この店で僕は何年もコーヒーを淹れ続け、店内にはコーヒーの薰りが染みついているようにさえ思う。

四人掛けの席が四つと二人掛けの席が一つ、あとはカウンターだけの小さな喫茶店だけれど、店の隅々まで目が届くし、僕にとっては丁度良い大きさだと思う。

西村がこの店に入つてから、店に物が随分と増えたなと思う。茶色い木目を基調とした落ち着いた雰囲気の店内には西村や従妹のトモ江の買つてきた手に收まるくらいの大きさの観葉植物がいくつも置いてあるし、窓辺には西村が彼氏の新島君と一緒に祭で取つてきただといふ金魚と金魚鉢が、まるでずっとそこにあつたかのように腰を据えている。

僕がこの喫茶店を始めたとき、もちろんバイトなんてものを雇うほどお客も来なかつたし、お金もなかつた。それもそのはずで、そもそもこの店を建てたのだから計画的なことじやなかつたし、店の開店資金なんてものを考えず、店の形態を整えるだけで全財産を使つてしまつたのだ。考えてみれば僕は、今日に至るまでずっと計画性のない人生を送つっていたのだな、と思う。

何気なく入つた文系の大学を卒業後、何をやりたいのかまったく考えていなかつた僕はギリギリまで就職活動を始めようとせず、気がついたときにはもうどこにも就職先がなくて、なんとか友人のコネで入つた会社も当然自分のやりたかったことではないのでやり甲

斐を見つけることができず、それでも一年はがんばったが結局やめてしまった。

それからは、昔取った杵柄というのだろうか。大学のサークル活動で何度か記事を書かせてもらった雑誌社になんとか仕事をもらい、周りにはフリー・ライターをやっているとかなんとか適当なことを言つて、バイトをしつつも特に一貫性もない記事を、それでもそこそこの人気はあつたので毎週数ページほど書き殴つていた。

そんなこんなでダラダラと生活をして四年。趣味のコーヒー以外にほとんど金を使わなかつた僕はほどほどに金がたまり、以前からやりたいと思っていた喫茶店を、全財産はたいてポーンと建ててしまつたのだ。

それが何年前だろう。確かトモ江が中学一年生だった頃で、今力ウンターに座つてコーヒーを飲んでいる彼女と同級生だったから、もう六年以上前になる。

つまり、四年。四年の間僕は、一人でコーヒーを淹れ続けたといふことになる。途中、地方誌に掲載されたりして一時的に客が増え、どうにも忙しくて一人で店が回せなくなつたときトモ江に手伝いに来てもらつたことはあつたけれど、それ以外は基本的に自分一人で接客から料理、飲み物、そして帳簿付けまでやつた。

その頃は休憩時間や閉店後、自分の為に淹れたコーヒーをもつたいないと思いつつも、いつも飲みきれなくて捨ててしまつっていた。

「マスター マスター」

と、コーヒーを飲みながらノートに目を落としていた西村が、力ツブを磨いていた僕に話しかけてきた。

「久しぶりにこのノート見たんだけど、結構お客さん書いてくれてるよ。『チョコレートパフェおいしー』とか、『チョコケーキが絶品!』とか……マスターがこだわりまくつてるコーヒーについては今回一つ言も書いてないけど

イタズラっぽい笑顔でこちらに向かつて開いたノートには、ページを丸々一枚使つたパフェやケーキの絵と一緒に、丸っこい文字で

西村が今言つたのと同じコメントやメッセージがでかでかと書いてあつた。そのノートは一年ほど前、西村が旅行にいったときについた喫茶店で『お客様意見ノート』というのがあるのを見つけ、それがとても面白かったのでこの店でも置くべきだと熱弁したので断り切れず置くことになつたノートだ。とりあえず四人がけのボックス席に置いておいたら思いの外評判が良く、見る側としても楽しいので常設することにしたのだ。

しかし、初めのうちは面白くて置いているだけだったノートだけれど、今ではこの店では欠かせないものになつていて、あまりこちらとは『ミニユニークーション』を取ることのない、一人や三人でいつも来る常連のお客さんのニーズを知ることもできるし、新規のお客さんが来たことや、その新しいお客様から見た店の意見なども知ることができ。経営者側や、いつも話すまるでこの店に住み着いているような常連客では分からなかつた新しい視点が、そのノートから発見される。

すでに『お客様自由帳』として店に定着したそのノートには、常連から新規のお客さんまで、落書きやらコメントやら、僕や西村あてのメッセージなどが好き勝手書かれていて、表紙のナンバーはすでに23だ。バックナンバーはもちろん、すべて店の倉庫に大切に保管してある。

「コーヒーについてのコメントが全くないわけじゃないけど、明らかに少ないよね、ケーキとかパフェとかに比べてさ。それに前、『コーヒーの種類が多くて訳が分かりませんでした』って意見書がてきたこともあつたでしょ。多すぎるんだよ、こいつ。ストレートコーヒーの数。豆屋じゃないんだからさあ」

この店の豆の品揃えを西村に全否定され、僕は少しむきになつて反論する。

「それはノートを書いてくれるのが若い女性のお客さんに多いからでしょ。どうしたつて意見は甘いもの系に偏るよ。それに、ケーキにしるパフェにしろ、店のものを褒めてくれるのはありがたいこと

です」

最初は豆の名前も知らなかつた西村も、最近になつてやつと店にある豆の種類を覚えてくれたし、一応一通りのコーヒーも飲んだ。それでもやはり西村はブレンズドコーヒーが一番飲みやすくておいしくと言つて、ストレートはこんなにいらないなんて言つ。しかしその西村が一番おいしいというブレンズドコーヒーだつて毎月僕が四苦八苦して、西村が覚えるのにせき労した沢山の豆達をブレンズして創つてゐるのだ。

すると西村はちょっと意地悪そうな顔をして、

「でもケーキとパフェって、コーヒーに比べて利益率低いよね」と言つた。

「ああ言えばいつ言ひ。利益率なんてどうでもいいの」

「そんなこと言つてるからこの店儲からないんだ」

西村は笑つて、またノートをぱらぱらとめぐりだした。

「でもマスターの「コーヒーは美味しいから安心して。私は好きだよ」「別に、慰めなんて必要としてないんですけど」

僕がそう言つと、西村はまた、今度は声を立てて笑つた。西村の言つ利益率のことももつともだけど、実際コーヒーだけが売れたとしても店は儲からない。コーヒーもサイドメニューも、両方売れて初めて店はやつていけるようになる。ただ西村は頭がいいから、多分そのことも分かつて言つてゐるのだろう。

するとふと、西村はぴくんと動いて、そのまま視線を開け放しにしている入り口のドアに向かたまま固まつてしまつた。

「何、どうしたの？」

僕が聞くと、西村は視線を入り口に固定したまま、小さな声で、

「……の気配がした」

「え？」

僕が聞き返すともう一度、「……の気配がした！」

何をいきなり言い出すのかこの子は、と思った。何の前振りもなくいきなり入り口の方に振り向いたと思つたらコレである。それ

に僕がいくら入り口に目をこらしても、ネコの姿なんて見えないし、気配なんて感じられるはずもない。それでも西村は、息を殺して身動き一つせず、ドアの方向を凝視していた。

「見たの？」

僕が聞くと、小さな声で「見てない」と言つた。左手が、ノートをめくつたままの形で固定されていて、無理が出てきたのかプルプルと小刻みにふるえていた。そのふるえが僕にはまるで糖分の足りない人の起こすケイレンのように見えてしまつて、なんだか唐突に西村に甘いものを与えたくなつた。

僕はショーケースの中に今一番多く残つていたチョコレートケーキを皿に盛ると、お客さんに出すとき同様にチョコレートソースと生クリームとアーモンドチップを皿にトッピングして、西村のプルプルとふるえている手の横に置こうとした。と、そのとき西村が、「あっ」と小さく声をあげた。僕のチョコレートケーキを持った手は、テーブルにそれを置く直前、空中で静止する。

僕がもう一度入り口に目を向けると、そこには茶色と白の混ざった毛をしたとら柄ネコが、ちょこんと首だけだしてこちらを覗いていた。

ネコは僕と西村を交互に見ながら、ぴくぴくと耳を動かしている。少しでも身動きしたら、そして少しでも音を立てたら逃げてしまう。そんな雰囲気だつた。

ネコは僕と西村にひとしきり警戒の色を示したあと、店内をぐるりと見回して、それから一力所に視線をとめた。ネコには人には見えない何かが見えるとよくいうけれど、この店にそんな、人には見えざるものなんているのだろうか。

しかしふと記憶をたどると、そこには西村の金魚と金魚鉢があつて、ネコはそれをじつと見つめているのだろうとこつ結論に至つた。

「金魚……みてるのかな」

限りなく小さなひそひそ声で、西村は僕と同じ考え方を言つた。ネコの視線は、未だ金魚鉢の方を向いたままだ。

「たぶんね」

と、僕もつられてひそひそ声で答える。小さな、まだ子供と大人の中間みたいなそのネコは、そう考へるとまるで一人前のハンターの目をしているようにも見えてくるから不思議だ。

と、ネコは唐突に後ろを振り向いたかと思つと、スッと走り去つてしまつた。

「あつ」

身体の緊張がスッと抜けて、西村は本から手を放し「狙つてた。
絶対金魚狙つてた！」と叫んだ。

僕も一瞬遅れてハツとして、もう皿を空中で止めておく必要もないのかと思うとカタタンと音を立ててテーブルにケーキを置く。

「狙つてたよねマスター」

西村は妙に興奮してうれしそうに僕に同意を求めてくるのだけれど、僕はどう対応していいのか分からず、「ん、ああ、うん」と曖昧な返事をして、それでも西村はお構いなしだった。ネコはどんなに可愛くても狩猟本能がどうのこうの、狩猟本能があると言うことは猫じやらしが充分通用するからどうのこうの、どうにも受け答えに困ることをそれでも僕の答えを求めるでもなく一人で騒いでいた。騒ぎついでにパタパタと椅子の脚を蹴つて身体が揺れるので、今にも椅子から転げ落ちるんじゃないかと冷や冷やした。

話は変わるが、先の金魚をもつてきたという新島君と西村は、自分たちが付き合つてているというけれど、僕はなんだか彼らの付き合いに違和感を持つてゐる。なぜなら彼らはお互い十九という若さのくせに、まるで長年付き添つた老夫婦か、はたまた同姓であるかのよつな付き合いしかしていらないのだ。

デートはもっぱらここ（しかも西村がバイト中で接客することが多い）だし、どこかに遊びにいくときもトモ江や同級生の厚志君というとても体格のいい子が一緒である。たまにどちらかの部屋に二人で行つたかと思うと、課題のレポートを手伝つてもらつていたの、本を読んでいたの（翔一君の本棚はまるで本屋並みだと西

村が言つていた)、浮いた話が一つも無いし、話からいつてそのままコトに及んだということはまず考えられない。

まるで恋愛のレンをすつ飛ばしていきなりアイに至り、しかもそのアイといつのが思いつきり円熟しているようだ、と思つ。まあ、小学校以前からの付き合いというのだから、それもありだと言えばありなのだろうけれど、ただ言いようによつては円熟しているというより、小学生のように幼い恋だとも言えなくもないのではないだろうか。

と、数瞬おくれて店に男性が一人入ってきた。四十代の、最近少し頭が寂しくなってきた、まるでこの店に住み着いているが」とく通い詰めている常連客、嶋井さんだ。

「こんにちは」

僕が言つと、「相も変わらずこの時間は人がいなくていいね」とかなんとか言いながら、いつもの四人がけの席に座り、新聞をテーブルめいっぱいに広げる。

すると、西村が不機嫌な声で「嶋井さんっ」と言つた。嶋井さんは訳が分からず、広げたばかりの新聞から皿をあげて、「なんだよいきなり」

「嶋井さんのせいでネコが逃げちゃったじゃん!」

「はあ?」と、嶋井さんは怪訝そうな顔をする。

「今そこに茶色のトラ柄ネコがいて、だけど嶋井さんがきたからおびえて逃げちゃったでしょ」

「そういやいたな。茶色いネコ」

嶋井さんは思い出すように言つた。

「見えてたんなら、なんで店に入つて来るのさー」

相変わらずめちゃくちゃなことを、西村は平氣で言つ。顔はまさに真剣そのものだ。僕は面白くなつて、二人に隠れてこいつそり笑つてしまつた。

「なに意味わかんねえこと言つてんだ。注文も取りにこないで、それが店員の常連客に対する態度か」

確かに嶋井さんの言つてこいることはもつともだつたが、それで収まる西村ではなかつた。

「注文取りつて言つたつて、嶋井さんはいつもコーヒーの、しかも決まつたやつしか飲まないでしょ」

「そりやあそうだが

と言つて、嶋井さんは黙り込む。何も言えなくなつたというより何かを言つて返すのが面倒になつたといつ感じだつた。

「こらこら、ネコが逃げたからつて、お婆さんにあたるんぢやないよ」

なんとか笑いをかみ殺して僕が言つと、西村は残念そうにうつむいて、「煮干しとか買つとこうかなあ」と呟いた。

「何だ、あのネコに一日惚れでもしたか?」

と嶋井さんが笑う。しかしそれには、僕が答える。

「や、でも可愛かつたですよ実際、あのネコ」

「だよねマスター。ほら、マスターがかわいいって言つべういんだから相当可愛かつたんだよ。そんなネコを、嶋井さんアナタは追い払つたのですよ」

僕がちょっと肩を持つとすぐに西村は調子に乗つて、口元をとばかりに嶋井さんを責めだした。嶋井さんをいじめるときのその顔が、妙に生き生きしているように見えるから不思議だ。

「ああもう、わかつたわかつた。謝るから大人しくそのままの前に出されてるケーキでも食ひながら、ちよつとは黙つてくれ」

すると、「えつ?」と驚いた顔をして西村が自分の座つてこいるテーブルに向き直る。

「マスターいつの間に? このケーキ食べていの?」

「食べちゃ駄目なら出しません。食べないなら引っ込めますよ」

「や、食べる食べる

言つて西村は、テーブルの上にあるカゴからケーキ用のフォークを出してつつき出す。「んまい」といつて、西村は本当においしそうな顔をする。僕は西村がケーキを食べ出したのを確認すると、口

一ヒーミルに嶋井さんに出す珈琲の豆を入れて、ゅつくつと挽く。

「マスター。コンビニで煮干しつて売ってるかな」

ケーキをぱくぱくとリズム良く口に入れながら、西村は言った。

「売つてるとこには売つてるんぢゃないかな。あゆむ君、あのネコ
餌付けする氣なの？」

すると西村は手を止めて、「だめかなあ？」と訊いてきた。

「別に僕は止めないけど……。餌付けしても、野良猫がなついてく
れるとはかぎらないよ？」

「別にいいよ、そんなの。私は自分のあげたご飯をネコが食べてくれ
るだけで充分なの」

そういうものかなあ、と僕は思つたけれど、そう言つたときの西
村はなんだかとても幸せそうな、というよりわくわくした顔をして
いて、僕は疑問を口にする氣にはならなかつた。

「けど、あわよくばつていう下心はあるんだろ？」「うう

と、新聞に目を落としていた嶋井さんが笑いながら言つた。

「まあ、そういう下心が無いって言つたら嘘になるけど……」

それからちよつとだけ黙つて、それからケーキを一口食べて、

「なんか、そう言つのは違つた氣がするんだよね」

「じゃあなんだよ」

と嶋井さんは聞くけれど、「わからない」と西村は答えた。「ほ
んとにそんな、別に懐いてくれなくてもいいんだよ。ただ、なんて
いうか自分のあげたご飯たべてくれたうれしいなあつていうか、
それだけ」

それからカップに残つたコーヒーを飲み乾して、

「それにしても、この時間帯ほんとに暇だよねえ」

と、急に話題を変えた。そこが西村の思考回路のおもしろことこの
うで、話題が一段落ついたと思つたらすぐに別の話題に移り、かと
思つたらいつの間にか元の話題に戻つてしたりする。

「お客様一人もいないなんて」

「おこ、今お前の後ろにいるのはなんだ」

と嶋井さんが突っ込みを入れるのに構わぬ、西村は続ける。

「この前この店の帳簿見たんだけどさ、結構黒字、ギリギリでしょ」

「それでも黒字です」

と僕は反論する。

「ほほ安定してギリギリなんですけど」

「安定してることとは、つまり常連客でもつてることで、その黒字は小さくても強い物です」

「でもさ、思つたんだけど、一応黒字に余裕があるときもあるんだけど、黒字に余裕が無いときつていうのが大体……ていうかほとんどつていうか全部つていうか、私がバイトに入つてるときなんだよね」

意外なところを突かれて、僕は何も言い返せなくなつてしまひ。確かに西村を雇つているときは、西村に払う給料もあるから経費がかさみ、黒字が削れてしまう。ただ、忙しい時間帯も一人で平氣だといつても、やはり西村がいるのといないのでは、身体にかかる負担がまったく違う。それを考へると、人件費がかかるといつてもやはり西村には居て欲しい。

「昼時や三時前後の時間は一人でも忙しいくらいだからいいとして、こうじう時間や、おやつ時が終わつて比較的暇になつたときまで普通の時給で私を雇つてるのつて、もしかしなくともとつても無駄なことなんぢやない？　ていうかおやつ時が過ぎた時点で私いらなくない？」

「別に、無駄じやないしいらなくないよ」

と、僕はなんとかそれだけ言つ。

「そうかなあ？」

と、西村は言つて、もう一口ケーキを口に入れた。

それから僕は黙つて磨き終わつたカツプを食器棚にしまい、一つだけカツプを持って席の方に回ると西村の隣に座り、置いてあつたコーヒーサーバーからカツプにコーヒーを移し、

「あゆむ君がいると、さつきのネコの事といい、退屈することがな

いし」

と笑いながら言った。それから「コーヒーを、一口飲む。やはりコ
ーヒーは、一杯以上たてたものがおいしい、と思う。

「なに、私はただの暇つぶし相手？ 暇つぶしの為だけに時給払つ
てるの？」

「別にそれだけって訳じやないけど、でも、こうして一緒にコーヒ
ーを飲む相手にもなつてくれるっていうのは、とても大きいよ」

「マスターの寂しがり」

怒るふうでもなくそう言つて、西村は「コーヒーに口を付けた。僕
もコーヒーを飲みながら、カップの中で一人笑う。誰かと一緒に飲
む「コーヒー」というのは、やはりいいものだな、と思う。

頭の中に、一人でコーヒーを飲んでいた頃の、サーバーに残った
コーヒーをシンクに捨てるときの映像が思い浮かぶ。ばしゃっと勢
いよくシンクにこぼれて、微かに芳ばしい薫りを放ちながら流れて
いく、焦げ茶色の液体。

「コーヒーは、一杯だけ淹れても妙にさりとてしまって、あま
りおいしくならない。だからいつも僕は、コーヒーをたてるときは
二杯以上たてるようにしている。

多分、コーヒーというのは誰かと一緒に飲むためにあるのだ、と思
う。

「なあマスター。なんだか店員一人でゆつくりつらうとするようだ
が、俺のコーヒーはまだなのか？」

「わつ、ごめんなさい。忘れてました」

僕は言われて思い出し、勢いよく立ち上がりカウンターの中に
回り込んだ。

「おいおいおい。大丈夫かよ」

「いや、豆を挽くところまではやつたんですけど、磨いたカップを
しまつたらそれで仕事が一段落したような気になってしまつて」
つらつらと言い訳を並べながら、僕はミルからドリッパーに挽いた豆を移す。お湯はすでに沸いている。三杯分くらいのコーヒーを

たてて、保温性の高いポットに入れ、それを暖めたカップと一緒に西村がテープルまで運ぶ。

「マスター、案外間抜け」

「コーヒーを運びながら、西村は楽しそうに笑った。

「クッキーおまけでつけときました。よければ食べて下さい」

「おお、悪いな」

嶋井さんは言うと、クッキーを口に運ぶ。嶋井さんはふだん、この店ではコーヒー以外ほとんど何も口にしない。

「それにしてもお前ら、今仕事してるので自覚、まったく無えだろ」

嶋井さんに言われて、僕と西村は同時にキョトンとしてしまった。僕は心のなかで、無いなあとつぶやき、ソレと同時に西村が声を出して、

「……無いなあ

と言った。

「そんなことより今私はネコの『ハシ』のことで頭がいっぱいです」と西村が言うと嶋井さんが、

「ネコの餌付けも結構だが、お前ネコに餌付けする前に、マスターに餌付けされてんの気付いてるか？」

「なに、それ」

すると嶋井さんは「それ、それ」といつて西村のケーキを指さす。

「え、何これって餌付けなの？ マスター」

と、急に西村が問いただすようにこっちに突っ掛かってきたので、僕は思わず声を出して笑ってしまった。

「笑つてないで答えてよ。ねえ」

西村がそう言つけれど、僕は答えず、ただ笑っていた。

動物扱い反対だの、労働者の権利がどーのこーの、自分は餌付けされても懐かないし懐いてないぞだの、西村は訳の分からぬ事を延々と喋りながらも、やはりケーキをパクつくのを忘れない。

僕は笑いながら、そういうえばまだ来月のブレンドを考えていな

な、と思います。

豆は何を使おう。ローストは、比率はどうじょう。ブレンンドを考えるのは大変だけど、やはり楽しい。西村の詰め寄つてくる顔を見ながら、僕は西村に言われた『多すぎる』ストレートコーヒーの事に考えを巡らせる。

今回は、西村の気に入りそうな味でも見つけてみようかな、と思った。

(後書き)

最後までお読みくださいありがとうございました。
お時間ありましたら感想いただければうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4099c/>

Cafe Slow Life

2010年10月8日15時29分発行